

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 14 日現在

機関番号：22701

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22610012

研究課題名（和文） 出産の高齢化に伴う親子支援モデルの検討

研究課題名（英文） Examination of a support model for children and parents who had their first childbirth at an older age

研究代表者

臼井 雅美 (USUI MASAMI)

横浜市立大学・医学部・准教授

研究者番号：50349776

研究成果の概要（和文）：

近年の出産の高年齢化に伴い高年初産婦とその夫に焦点をあて、出産直後、出産後4か月、出産後1年の縦断研究を行い、35歳未満の初産婦夫婦との比較検討から精神的な特徴と親子相互作用の特徴を明らかにした。その結果、高年初産婦夫婦は子どもの情緒面にかかわる育児ストレスを抱えてはいるものの、夫婦共に精神的な健康状態は良好で、出産後4か月に差があった精神的な健康状態や親子相互作用は、出産後1年後には差があまりみられなくなった。

研究成果の概要（英文）：

Since there are more mothers having their first childbirth at an older age in recent years, longitudinal studies are conducted on such mothers and their husband throughout 3 different periods; right after they had a child, 4 months after the childbirth, and a year after the childbirth. The objective of the studies was to reveal their emotional characteristics and characteristics of parents-children interactions, compared to those who had their first childbirth when they were younger than 35 years old. The result shows that older parents had stress over things related to child's emotions, but both wives and husbands' mental health were well. 4 month after the childbirth, there were discrepancies in mental health and parents-children interactions between parents who had their first childbirth at an older age and those who had theirs when they were younger than 35 years old. These discrepancies were no longer noticeable a year after the childbirth.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：時限

科研費の分科・細目：子ども学（子ども環境学）

キーワード：子育て支援，高年初産婦，親子相互作用

1. 研究開始当初の背景

- (1) わが国における少子化は急速に進展しており、その要因として晩婚化が取り上げられている。その中で、第1子を出産する女性の年齢は高年齢化しており、2008年には全出生数の2割を超えている。
- (2) 日本産科婦人科学会では35歳以上の初産婦を高年初産婦と定義しているが、高年初産婦は従来から母体自身の老化のために軟産道強靱、妊娠中毒症(妊娠高血圧症候群)、分娩時の出血、帝王切開、染色体異常など産科学的な問題が多いこと身体的なリスクが指摘されているだけでなく、不妊治療後の者が多く、治療に対するストレスによる心理的な問題も抱えている。しかし、一方で社会的にキャリアを積み自分に自信があるため、落ち着いて妊娠・出産・育児に対応し、様々な経験が育児に専念しやすくなっていると認識されている。
- (3) 高年出産の研究は、身体的リスクや治療成績を検討したもの、妊娠・分娩期に着目したものが圧倒的に多く、出産の高年齢化が進む今日、妊娠・出産だけではなく、長期的な育児も含めた親子への支援体制づくりが急務である。特に高年初産婦の重要なサポートとして欠かせない夫も含めた支援プログラムが必要であるが、高年初産婦の夫に焦点をあてた研究はみられていない。

2. 研究の目的

- (1) 近年の出産の高年齢化に伴い、高年初産婦とその夫に焦点をあて、出産直後から1年後までの期間を縦断的に調査し、親子相互作用とその後の育児から親子関係の特徴を明らかにする。
- (2) 高年初産婦の母子だけでなく、父子における育児行動を検討し、高年初産婦親子への支援モデルへの構築をめざし、現代における育児支援の一助とする。

3. 研究の方法

- (1) 研究デザインは質問紙調査法および親子の観察法による比較研究で、2010年11月~2011年11月に出産した初産婦と初めて父親になる夫を対象とした。高年初産婦として母親の年齢が35歳以上の初産婦夫婦、コントロール群として母親の年齢が35歳未満の初産婦夫婦を対象とした。
- (2) データの収集は産褥入院中(以下、産褥早期)、出産4か月後、1年後に行い、産褥入院中には研究者が質問紙を手渡し、記入後郵送にて回収した。出産後4か月および1年後の調査は家庭訪問を実施し、各種質問紙はあらかじめ郵送し、家庭訪問時に受け取った。
- (3) 調査内容は、産褥早期と4か月・1年後に

はCES-D(合衆国国立精神保健研究所疫学的抑うつ尺度)、4か月・1年後にはGHQ30(精神健康度:General Health Questionnaire)および日本版PSI(Parenting Stress Index)、Network Survey(個人・専門家のソーシャルサポート)および母子・父子相互作用の観察法としてNCATS(Nursing Child Assessment Teaching Scale)による遊び教示場面NCATSを実施した。

4. 研究成果

- (1) 研究承諾を得た夫婦は、高年初産婦夫婦19組(高年群)、コントロール群33組(対照群)の計52組で、その背景は表1~4の通りである。

表1. 対象者の属性 (n=52)

項目	合計(n=52)		高年(n=19)		対照(n=33)		P
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
母親の年齢(歳)	32.1	5.42	37.5	2.04	29.0	4.19	.000 **
父親の年齢(歳)	33.1	5.77	37.1	4.06	30.8	5.40	.000 **
母親の教育年数(年)	14.7	1.90	14.2	2.07	14.6	1.82	.478 ns
父親の教育年数(年)	14.7	2.70	14.6	2.73	14.7	2.75	.819 ns
児の在胎週数(週)	39.1	1.38	38.7	1.49	39.3	1.31	.147 ns
児の体重(kg)	3012.4	425.92	2984.0	557.22	3029.2	344.12	.793 ns

表2. 母親の属性 (n=52)

項目	合計(n=52)		高年(n=19)		対照(n=33)		P
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	
家族形態							
核家族	49	(94.2)	17	(89.5)	32	(97.0)	.264 ns
拡大家族	3	(5.8)	2	(10.5)	1	(3.0)	
就労形態							
常勤	19	(36.5)	5	(26.3)	14	(42.4)	.680 ns
パート・アルバイト	3	(5.8)	1	(5.3)	2	(6.1)	
無職	28	(53.8)	12	(63.2)	16	(48.5)	
自営業	2	(3.8)	1	(5.3)	1	(3.0)	
経済状態							
経済的にかなり余裕がある	3	(5.8)	2	(10.5)	1	(3.0)	.554 ns
経済的に少し余裕がある	31	(59.6)	11	(57.9)	20	(60.6)	
経済的に少し困っている	17	(32.7)	6	(31.6)	11	(33.3)	

表3. 妊娠・出産の状況 (n=52)

項目	合計(n=52)		高年(n=19)		対照(n=33)		P
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	
不妊治療							
なし	43	(82.7)	13	(68.4)	30	(90.9)	.059 ns
あり	9	(17.3)	6	(31.6)	3	(9.1)	
妊娠中の異常							
なし	46	(88.5)	15	(78.9)	31	(93.9)	.175 ns
あり	6	(11.5)	4	(21.1)	2	(6.1)	
出産形態							
経産分娩	48	(92.3)	15	(78.9)	33	(100.0)	.014 *
帝王切開	4	(7.7)	4	(21.1)	0	(0.0)	
児の性別							
男	29	(55.8)	15	(78.9)	14	(42.4)	.019 *
女	23	(44.2)	4	(21.1)	19	(57.6)	

表4. 父親の属性 (n=40)

項目	合計(n=40)		高年(n=18)		対照(n=22)		P
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	
就労形態							
常勤	17	(94.0)	17	(94.4)	30	(93.8)	.234 ns
パート・アルバイト	2	(4.0)	0	(0.0)	2	(6.3)	
無職	1	(2.0)	1	(5.6)	0	(0.0)	
育児休暇の取得							
既にとった	8	(16.0)	4	(22.2)	4	(12.5)	.883 ns
今後とる予定	4	(8.0)	1	(5.6)	3	(9.4)	
とる予定はない	27	(54.0)	9	(50.0)	18	(56.3)	
わからない	9	(18.0)	3	(16.7)	6	(18.8)	
その他	2	(4.0)	1	(5.6)	1	(3.1)	

- (2) 産褥早期から出産1年後におけるうつ状態

表5 高年群と対照群のCES-D Mann-Whitney 検定

項目	母親(n=52)			
	N	平均値	標準偏差	有意確率
産褥早期				
高年	19	9.2	7.39	.947 ns
対照	33	8.7	5.92	
出産後4か月				
高年	17	8.1	6.69	.906 ns
対照	29	8.4	7.92	
出産1年後				
高年	15	9.5	7.70	.444 ns
対照	25	7.5	6.47	

項目	父親(n=45)			
	N	平均値	標準偏差	有意確率
産褥早期				
高年	19	9.2	9.61	.625 ns
対照	33	7.6	6.80	
出産後4か月				
高年	17	6.6	5.10	.897 ns
対照	29	8.0	8.66	
出産1年後				
高年	15	7.5	5.65	.762 ns
対照	25	7.4	6.53	

高年群と対照群を比較した結果、CES-D は高年母親で1年後に上昇がみられたが、母親・父親ともに両群に差はみられなかった(表5)。

表6 高年群と対照群のGHQ

項目		出産後4か月				出産1年後			
		N	平均値	標準偏差	有意確率	N	平均値	標準偏差	有意確率
Mann-Whitney 検定									
GHQ TOTAL	高年	17	5.8	3.82	.715 ns	17	6.2	3.74	.418 ns
	対照	25	6.3	4.64		25	5.1	4.22	
一般的な症状傾向	高年	17	1.1	1.09	.412 ns	17	1.5	1.45	.325 ns
	対照	25	1.3	1.05		25	1.1	1.20	
身体的症状	高年	17	1.2	1.24	.588 ns	17	1.3	0.85	.632 ns
	対照	25	1.4	1.29		25	1.2	1.28	
睡眠障害	高年	17	1.9	1.39	.895 ns	17	1.7	1.32	.852 ns
	対照	25	1.9	1.35		25	1.7	1.47	
社会的障害	高年	17	0.4	0.87	.836 ns	17	0.3	0.63	.720 ns
	対照	25	0.4	0.88		25	0.3	0.62	
不安と気分変動	高年	17	1.1	1.69	.889 ns	17	1.3	1.55	.347 ns
	対照	25	1.1	1.49		25	0.7	1.14	
希死念慮うつ傾向	高年	17	0.1	0.24	.553 ns	17	0.0	0.00	.116 ns
	対照	25	0.3	0.80		25	0.2	0.39	
Mann-Whitney 検定									
* p<.05									

表7 高年群と対照群の育児ストレス (PSI)

項目		出産後4か月				出産1年後			
		N	平均値	標準偏差	有意確率	N	平均値	標準偏差	有意確率
Mann-Whitney 検定									
* p<.05, ** p<.01									
TOTAL 育児ストレス総得点	高年	17	184.6	31.87	.590 ns	15	175.1	38.12	.750 ns
	対照	25	175.1	40.68		25	179.3	31.10	
Ctotal 子どもの側面	高年	17	83.8	14.03	.255 ns	15	76.3	15.21	.417 ns
	対照	25	75.8	21.42		25	81.4	16.93	
C1 親を喜ばせる反応が少ない	高年	17	11.4	3.12	.471 ns	15	10.6	3.33	.247 ns
	対照	25	11.7	2.81		25	11.7	3.36	
C2 子どもの機嫌の悪さ	高年	17	16.7	3.06	.181 ns	15	14.1	3.68	.125 **
	対照	25	15.3	4.53		25	17.0	6.12	
C3 子どもの期待どおりではない	高年	17	10.3	3.80	.370 ns	15	8.9	3.07	.695 ns
	対照	25	9.4	3.19		25	8.5	2.34	
C4 子どもの気が散りやすい/多動	高年	17	11.1	3.13	.011 *	15	15.1	3.97	.655 ns
	対照	25	11.4	3.33		25	15.5	3.90	
C5 親につきまよう/人に慣れにくい	高年	17	12.9	2.29	.290 ns	15	11.9	3.93	.987 ns
	対照	25	12.3	3.17		25	12.3	3.34	
C6 子どもに問題を感ずることがある	高年	17	7.9	2.60	.786 ns	15	7.3	2.69	.974 ns
	対照	25	7.6	2.38		25	7.2	2.25	
C7 刺激に過敏に敏感/ものに慣れにくい	高年	17	10.6	2.55	.595 ns	15	8.4	2.77	.943 ns
	対照	25	10.9	2.35		25	9.3	3.06	
Ptotal 親の側面	高年	17	109.8	21.13	.699 ns	15	98.8	24.53	.824 ns
	対照	25	96.6	26.97		25	97.9	16.12	
P1 親役割によって生じる規制	高年	17	22.8	4.79	.364 ns	15	22.4	4.93	.425 ns
	対照	25	21.9	5.49		25	20.5	4.62	
P2 社会的孤立	高年	17	14.7	4.44	.699 ns	15	14.5	4.03	.785 ns
	対照	25	15.2	4.22		25	15.1	4.28	
P3 夫との関係	高年	17	10.7	4.55	.513 ns	15	11.4	4.44	1.000 ns
	対照	25	11.4	4.20		25	11.5	3.99	
P4 親としての有能さ	高年	17	19.6	6.88	.865 ns	15	19.8	6.38	.898 ns
	対照	25	20.9	4.21		25	19.7	3.83	
P5 抑うつ・罪悪感	高年	17	8.8	3.93	.577 ns	15	8.9	4.68	.749 ns
	対照	25	9.4	3.77		25	9.8	2.70	
P6 退院後の気落ち	高年	17	9.4	4.65	.724 ns	15	9.8	3.94	.313 ns
	対照	25	9.5	3.82		25	9.4	3.82	
P7 子どもに愛着を感じにくい	高年	17	5.7	1.90	1.000 ns	15	5.4	1.80	.663 ns
	対照	25	4.7	1.97		25	5.9	2.39	
P8 健康状態	高年	17	8.1	2.70	.158 ns	15	6.6	2.40	.456 ns
	対照	25	6.9	2.78		25	6.6	2.12	
Mann-Whitney 検定									
* p<.05, ** p<.01									

(3) 出産後4か月・1年の精神健康度

GHQにおいて、出産後4か月では対照群が、1年後では高年群が対照群が高い傾向にあった。出産後4か月における父親で、身体的症状において対照群が有意に高かった(p<.05)が、1年後には有意な差はみられなかった(表6)。

(4) 出産後4か月・1年後の育児ストレス

PSIでは、出産後4か月の高年群で母親が<子どもの気が散りやすい(p<.05)>、父親が<子どもの機嫌の悪さ(p<.01)>で有意に高かったが、1年後には有意差はみられなかった(表7)。

このことから、高年初産婦夫婦は子どもの情緒面について気にかけていることが伺え、高年初産婦の夫婦は周囲に同年代の育児上の仲間が少なく、子どもに対するイメージがつきづらいことが推測される。今後、高年初産婦夫婦には育児上の不安などを話し合える仲間作りをサポートするなどの支援が必要であることが示唆された。

(5) 出産後4か月・1年後のネットワーク

個人的なネットワークではおおよび専門職に関するネットワークでは母親・父親ともに差はみられなかった。

(6) 出産後4か月・1年後の親子相互作用

高年群と対照群を比較検討した結果、4か月において、「認知発達の促進」で、母子相互作用では対照群が、父子相互作用では高年群が高く有意な差がみられた(p<.05)。しかし、1年後においては有意な差はみられなかった。

一般的に父親は遊びに対する子どもの反応が良いと言われているが、特に高年初産婦の夫は子ども側の父子相互作用が良好なことから、社会経験の量や質が影響しているのではないかと推測される。今後は、母親だけでなく、育児に対し自信を失いがちな父親に対して父子関係の良好性を支持し、フィードバックしていくことが有効と考えられる。

5. 主な発表論文等

[学会発表] (計3件)

- ① 白井雅美、園部真美、坂梨薫、勝川由美、鍋田美咲、廣瀬たい子、高年初産婦夫婦の産褥期における心理的側面の特徴—35歳未満の初産婦夫婦との比較より—、第53回日本母性衛生学会総会・学術集会、平成24年11月16日~17日、アクロス福岡(福岡県)。
- ② 白井雅美、園部真美、勝川由美、鍋田美咲、坂梨薫、加藤千晶、廣瀬たい子、高年初産婦夫婦における出産後3~4か月の親子相

相互作用－35歳未満の初産婦夫婦と比較より－，乳幼児保健学会第6回学術集会、平成24年9月26日、東京医科歯科大学（東京都）。

- ③ 臼井雅美、坂梨薫、勝川由美、鍋田美咲、園部真美、廣瀬たい子、出産の高齢化に伴う親子支援モデルの検討－高年初産婦と35歳未満の初産婦夫婦における心理的側面の比較より－、乳幼児保健学会第5回学術集会、平成23年10月29日、武蔵野大学（東京都）。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

臼井 雅美 (USUI MASAMI)
横浜市立大学・医学部・准教授
研究者番号：50349776

(2) 研究分担者

坂梨 薫 (SAKANASHI KAORU)
横浜市立大学・医学部・教授
研究者番号 60290045

園部 真美 (SONOBE MAMI)
首都大学東京・健康福祉学部・准教授
研究者番号：70347821

勝川 由美 (KATSUKAWA YUMI)
横浜市立大学・医学部・助教
研究者番号：20438146

鍋田 美咲 (NABETA MISAKI)
横浜市立大学・医学部・助教
研究者番号：00567555

(3) 連携研究者

廣瀬 たい子 (HIROSE TAIKO)
東京医科歯科大学・医学部・教授
研究者番号：10156713